

可觀小説卷十八

一、瑞龍公の名馬渡利黒

瑞龍公に渡利黒と名づくる名馬あり、本堀左衛門督家臣渡利八右衛門といふ者の馬也。長は四寸餘ありて、眞の黒にて無類名馬也。淺井駿の時寺井の三堂山より彼馬にめし、立田の中を駆通り給ふに、平地を行くが如し。御秘藏不斜。其後加藤清正所望に付被遣候て、清正にても寵愛し、四十七歳に斃れたり也。井上湖左衛門話

一、大正持合戦鯨橋の鎗

大正持合戦の時鯨橋の鎗、此口へは利政公御人數かゝる。橋の内に柵を付たり。夜明方に山口右京五十人許にて、鐵炮、鎗等爲持て柵の内を下知して通る。九里少藏即利政公母衣かけ、母衣の裙を腰に挟み、刀を抜て懸る。右京が家來五六人にて少藏突伏せ首を取る。丹羽織部、大道寺玄蕃鎗を合す。玄蕃大身の鎗にて足の甲を割られて引取る。家來三人付たる内、少次郎といふ者は鐵炮にて死す。残る二人にて玄蕃を扶け退く。織部は鎗にて敵を押して通合ふ所に、鐵炮

にて左の腕を打れ鎗を落す。織部家來矢田小左衛門敵を押ゆ。小左衛門が弟半佐と鎗持彦兵衛二人にて、織部を肩にかけて退く所に、初に玄蕃退き来るを見て利政公の人數、前に鎗合ありとて駆来る者共に道にてゆき合ふ。然所其後織部に御加増千石、玄蕃に五百石被下。玄蕃口惜く思ひて御國を退去、尾州へ奉公す。二度めの一番鎗は山田出羽也。其時佐藤久右衛門、鎗脇の鐵炮を能く打たり。丹羽織部話

一、伊藤權右衛門加賀を立退く

信長公の臣下に瀧澤金右衛門後稱大西金右衛門伊藤權右衛門といふもの、公御變死の後舊友の好とて利長公へ御召寄、御咄の友なり。或時右金右衛門並千福長左衛門被召出、胄を御物數寄被仰付、各みられよとて御出し候。瀧澤・千福兩人は、扱々見事成御胄也とてほむる所に、伊藤は扱も見度もなき胄かなと云ふ。公御不興にて、何方が見ともなき哉と被仰處、伊藤何方も皆見度なしと云ふ。公、我等は随分自慢也と被仰候。伊藤さればそれは數寄々々じやと云ふ。公數寄々々とはと被仰候處に、鍋を焼てかぶるも、鼻をかきて塩を摩るも皆數寄々々と云ふ。其時公脇刺を抜打に拂ひ給へば、伊藤に

少し當りぬ。千福・瀧澤兩方へ取付て、伊藤をば城外へ伴ひ出づ。伊藤大手の脇の柵にもたれかゝり、扱もうつけたる手を負たるはと云ふ。各引連て、瀧澤が宅迄入て示談の上、伊藤をば上方筋へ立退く。柏野の驛迄は可行とおもふ時分、伊藤權右衛門御成敗とて瀧澤が宅へ數人押寄す。瀧澤出迎へ、伊藤は是に居不申候、やさがしあれと云ふ。各やさがしすれども不見。其段言上すれば公甚怒て止めぬ。か様の儀にて瀧澤一生千石にて終る。其後大西金右衛門と改稱し、寛永十五六年の頃九十餘歳にて病死す。伊藤も千石を給す。其胄は頭形にて、上の少し高く大なる耳の付たる胄也。松任の城に被成御座候時の事と。千福長左衛門話

一、津田勘兵衛岡山にて鎗合

大坂夏陣岡山にて津田勘兵衛と鎗を合せたる早川太兵衛といふもの、其後賀州へ尋來る。勘兵衛内胄を突たる時、互の心おぼえ有之、鎗の穂先少許折たるよし。其様子物語の首尾相合て去る。太兵衛本多能登守へかゝへられたりと云。

一、松平伯耆使者の役御請の覺悟

元和の初奥村攝津於江戸、微妙公並御家中の事共目安に調

て訴へたり。此儀に付江戸より御不審申來る。其御答の使に松平伯耆を被命。伯耆則御請したり。伯耆事武功はしれたる儀なれども、無分別にて不口上也。何とて攝津が相手被成可申哉。いなものに被命たり。伯耆も疎忽に御請申たりとて、一統に批判しぬ。横山山城は最前も大儀の申分首尾能く調へたり。是に可仰付事と上下沙汰せり。其子治部父の伯耆を諫て云ふ。御家中一統の評判に候へば、是非とも御斷可然哉と云ふ。伯耆云。我等の無分別、不口上は殿は能く御存知也。然に我等御使被仰付候は、各の存寄と我等心得とは格別也。江戸へ參候はゞ、殿中か或は評定所にて成とも、攝津と參會次第に理不盡に切殺し、我等は自殺すべし。殿は上の婿殿なれば、それほどの儀にて大事にも成まじ。扱其御斷りの被仰分は、城州を被遣候へば、前後能き首尾と存す。其を殿には思召候て我等を被遣もの也。各が長評判不可用と云ふ。治部も御尤とて退出す。其後江戸より、攝津事無故して主君の事を訴へ申儀、御聞届に不及とて、伯耆も不罷越候。御池大橋話

一、大坂陣戰功御尋の案文